

親がみてきたこと・してきたこと

京都・学校に行かない子と親の会の経験から

恩 田 良 昭

(京都・学校に行かない子と親の会世話人)

中村 学術フロンティア推進事業「ケア新時代」シリーズ第3期公開連続企画「当事者のまなざし」として5回、お話を聴く場を設定しました。第1回目は不登校の話です。ひきこもりともつながっていくかもしれません。親の立場から、「学校に行かない子と親の会」をつくって、親と子の居場所を運営されてきた恩田さんにおこしいただきました。この会は数ある不登校関連のグループのなかでも古くから活動している「老舗」です。長い取り組みだと思います。ご自身のお子様のことも含めて、会の運営のことなど、最初に恩田さんから話題提供をしていただき、その後、不登校を体験された方もあるかと思ひますで、フロアの方々と話し合いをしたいと思ひます。

会発足15年

恩田 会社員で、年齢は54歳です。15年、会をやっています。代表でもなく、世話人の一人です。企画から通信まで、長年毎月会報をつくってきました。例会を月1回やっていますので、15年×12回やってきました。私の会は京都では元祖だと思っています。「京都の不登校ガイドブック」が、オフィスパワーアップの編集で出ています。この中にはたくさんの会が紹介されていますが、15年前、こういう情報はほとんどなかったんですね。15年前の登校拒否、不登校は世間から見ると落伍者の集まりというイメージでとらえられていたのではないかと思ひます。「不登校」「学校に行かない」「登校拒否」は悪いことというイメージで見られている。「皆、学校に行っているのに、なぜ学校に行けないのか、行かないのか」、そ

ういう圧力が強かったと思います。

私の場合、15年に遡る6年前、21年前から不登校問題にかかわってきました。私の子どもは1975年生まれで、1981年に小学校1年生です。小学校1年生の時から文部省でいう「年間50日以上」学校に行かない実績をつくった。1981年から2002年まで21年間、不登校の問題から継続してひきこもりの問題を未だに引きずっているということです。

そういう私のこれまでの長い歴史の中で「不登校」は切っても切り離せない問題で、今の「ひきこもり」という問題は現実の問題であるわけです。私の場合、そのことを隠したり、親戚にも言わないということではなく、職場でも聞かれれば「学校に行ってませんよ」と言ってきました。なぜクールに自分の子どもを見られるのか。

双子の子どものこと

最初「学校に行かない」と子どもが言った時、子どもの様子、目の動きを見たんです。言葉にはださないけれど「学校に行きたくない」という目をしていました。それが1981年5月15日だったと思います。子どもが体で表現している意味を、どういふことが聞かなければならないと思ったわけです。その頃から「なぜか」ということについて常に考えてきました。ホームページでは「複眼思考」「生涯発達達人」という表現をしたりしていますが、未だにいろんなことについて「なぜか」と考えつづけています。この21年間、そういうことを考えながら、自分なりに判断しながら生きてきたことになるかなと思います。1981年の問題があっているころ考えました。本も読みました。笠原嘉さんの岩波の本を読みながら自分の子どもと照らし合わせながら「どういふふうを考えていったらいいかな」と。

私の場合、もう一つ違った側面があります。子どもは双子なんです。双子はどのような心理状況であるのかわからないので、当時、立命館大学文学部の先生で双子の研究者がいて、「どうしたらいいでしょう」と話をしますと、ルリアというソ連の研究者の本を紹介されて読んだことを覚えています。双子というのはいふものか。双子はうまくいっている時はいいんです。自分の子どもを見て仲良く

遊んでいるのを見るとほほえましくて、いいなと思っていました。言葉の発達が遅い。二人で生活するのに「言葉はいらない」という意味なのかなと思っていましたが、わかりません。双子で不登校になりました。その様子を見てみると、片方が行けば片方が休む。片方が調子が悪いと片方は調子がいい。なぜなのかわからなかった。兄貴だから弟だからと区別したこともなかったです。未だにわからないということですが。小学校も半分以上行っていない状態です。後半には母親が自転車で連れていくこともできなくなったこともあり、学校と疎遠になりました。小学校6年生の時、校長に会いに行って「うちの子どもは卒業式にも出ません」といいました。私は式に参加する、しないという問題は大きな問題とは思ってなくて、「行きたくなかったら行かないだろう」と。そこで必ず学校関係者とは論争になるわけですが、「とにかく卒業させていただきたい」と言いました。中学は二人とも全く行っていません。制服も自転車も買わず、入学の用意は一切しませんでした。

私は守山市に住んでいますが、守山市教育研究所があって、一人の子どもはそこへ通いました。「高校をどうするかな」と思っていたら「勉強したいなら通信制の膳所高へ行ったら」と入学して、4年かかって卒業しました。なぜそうできたのか、入学して卒業するまでドロップする人が大半で、5%、10%となると思いますが、何とか卒業はしました。運転免許証をとって外には自由に出ている。その子の場合には職についておりません。何ヶ月かアルバイトしたことはありますが、家にブラブラいる状態です。

ひきこもりの子ども

もう一人の子どもは小学校もほとんど行っていないのですが、閉じこもったままで外に出ない状況で中学時代もほとんど外に出ていません。16歳の頃、「学校に行かない」と宣言しておりましたので守山にいたわけです。

二人とも20歳くらいになった時、反目しあうようになりました。喧嘩もするし、あの年の喧嘩は危険な様相を呈しますので、私が止めに入ることもありました。この子たち二人と一緒に生活をするのはどうかと将来を考えて、一緒にいるこ

とが弊害になると私は思ったんですね。だから分家をつくろうと京都に一人連れてきました。この兄弟は5年間、一回も顔を合わせておりません。その子は京都で暮らしていますが、ほとんど外には出ません。私が覚えている限り、5年間で外に行ったのは2回くらいだと思います。パソコンを大型ゴミに出すとか、掃除機を処分したりする時、京都市の場合はシールを張って場所まで運ぶので、私が運ぶと手伝って運んでくれたというくらいです。あとは自らの存在を消すような形で、夜になっても明かりはつけない。外から見えないように明かりをつける。無人の家のような恰好ですね。私が帰ってくると、さっと電気はつけてくれる。ご飯の用意はしてくれます。缶ビール、いつもお酒の用意もしてくれて、ご飯もつくってくれる。私の専属の料理人、洗濯人という恰好ですが、本人はそのことを不自由に思っているわけでもなく、恥ずかしいとも思っていない。「誰かがお父さんの世話をしないといけない」というつもりやっていると、「ありがとう」と言っています。

私の生活は朝、起きたら「おはよう」。寝る時には「おやすみ」と言いますし、子どもたちも同様に返します。日常はごく平凡な家庭で、生活上の問題は特にないと思います。ですが、今、現在、彼は27歳です。27歳の子どもがこれからどうするのかを考えると「このままでいいのかな」ということです。「このままでいいのかな」というのは21年間ずっと考えてきたことです。「なぜか」ということを考える。「このままでいいのかな。もっと違う方法があるのではないか」と考えながら21年間来たということなのです。

情報を求めて

当初、いろいろ読みあさったり、情報を仕入れている段階で出会ったのが「フリースクール研究会」です。この会の発足は1983年です。当時の冊子があります。既成の学校教育と違う発想で、このフリースクール研究会に参加していたんですが、その運動は4年くらいで潰れてしまいました。1988年に一応解散しました。私の関わっている「学校に行かない子と親の会」は15年続いています。最初から「こういう会はなくなった方がいい」と思いながらずっと続いてきているわけです。

が、あまり片意地を張らないで運営してきたから続いているのかなと思います。私たちの会では発足の2、3年目の参加者数は毎回、10人くらい新しい人が参加する状況がありました。朝日新聞の「情報ラック」というお知らせ欄に次の例会を案内すると、大阪をはじめ広島、四国、福井から情報を求めて出ておいででした。新聞に載せて宣伝するだけですが、自然発生的に人が集まってくる。例会をすると自己紹介が5分としても全部回りきらない。そこで3つのグループに分けて話をしてもらおう。私は音頭をとるだけで、進行は勝手に任せて、終わる頃になると「時間ですよ」と終わる。自由に話をしてもらおうことを中心にしてきました。手を抜いているのですが、結論は大体決まったようになるんですね。「自分の子どもだけ、自分の家族だけ苦しい問題を抱えているわけではない」と皆さんホッとして元気になって帰ってもらうことができた。

子と親の会との出会い

1991年、渡辺位（たかし）さんという東京の児童精神科医を招いて大阪で講演会をやりました。250人くらい来られて、大阪で会をつくってもらった。

会は「学校に行かない子と親の会」としていますが、私がこのネーミングをつけたわけではなく、藤岡孝太郎さんがつけたのです。私は最初からこの会の立ち上げに積極的にかかわっていたわけではなく、「会がなくても自分の家族は自分で守ることができる」というつもりでしたが、藤岡さんが京都に転勤で来たんです。超伝導などの研究者で、一緒にやり始めたのですが、名前をどうするかということで「学校に行かない子と親の会」と名前をつけました。「子と親」という名前をつけた会は全国でもあまりないと思います。京都と大阪だけです。インターネットで調べると他にもあるのですが、子と親の会ということで、子どもが参加できる企画をつくってきました。たとえば1989年、キャンプをやりました。化石採集会、忍者村見学、クリスマスパーティなどを企画しました。特に呼びかけて人を集めることは一切せず、来たいものが来るという方式で、子どもたちも来る人は来ておりました。

子どもたちがそういうところに来るにはいろんなパターンがあり、「行ってみよ

うかな」と思って、会場の廊下までは来るが、そこからもう一步、中に入れない子どももいます。そこで帰って行く人もいます。なかには参加したけれども、3日間、寝込んだという人もいます。そういう子どもたちは他でも同じようなパターンであるわけで、普通は「学校に行けない子と親の会」と名前をつけるだろうけれど、藤岡さんは「学校に行かない子と親の会」とネーミングされて、私も「いいよ」と賛成したわけです。藤岡さんが、立ち上げて半年で「じゃ、さよなら」と名古屋に帰っていったので、しょうがないので私が後を引き継いで15年来たということです。

親の考えをわかってほしい

1981年から考えてきて、「どうしても学校にわかってほしい。担任に親の考えを理解してほしい」と、当時、ワープロが職場に一つくらいあるかなという時代ですが、ワープロを使って手作りの本をつくりました。1984年につくった本で、256ページ、ほとんど手作りです。「先生に理解してほしい、学校に理解してほしい」とつくったわけです。「担任の先生にぜひ読んでください」という親の気持ちなんです。なぜつくることができたか。私が読みあさってきた書籍及び、妻に「紙切れでいいから子どもの様子をメモに書いて」と言って、それを材料にしています。紙切れも大量になり、内容的には割愛していますが、子どもの様子のわかる妻とともにつくったわけです。私は仕事をしていますので、私が知らない子どもの様子も記録されています。

学校の先生に、なぜ渡そうと考えたのか。学校の先生は勉強していないですね。小学校の先生は不登校とか登校拒否の子どもをほとんど体験していない。子どもは自由に教育できるので、こういう子どもがいることすら理解していない。「子どもの心は何ですか？」と先生と論争するんですが、納得のいく答えは出てこなかった。「なぜ学校に行かない子どもが出現するのですか？」と聞くのですが、答えはありません。論争にはならなかった。「これ、いっぺん読んでください」と渡そうとしたわけです。その中には私の抗議ではないけれど、学校に対する質問状もあります。

「河西小学校長殿、守山市教育委員会殿。現在、私の二人の子どもが河西小学校4年に在学しています。ご存じの通り、二人には不登校の傾向があり、日々親にとっても学校におかれても現状打開がなかなか困難な状況であります。このことに関して学校長はじめ先生方にご苦勞をおかけしており、私どもは感謝にたえません。このことは教育委員会におかれましてご存じの通りであろうと思えます。有名人だったんです。1,000人を超える小学校で、学校に行かない子は二人、私の双子でした。私が学校に行くと先生方は、どの子の親かわかっておられた。

「さて教育を受ける権利は国民一人ひとりであり、とりわけ義務教育を受ける年齢の子どもは学校に通わなければならないとされています。問題なのは子どもが積極的に学校へ行こうとしないことにあります。学校を拒否して行かないのではなく、行きたいが、行けない状態なのです。一般的な不登校だったわけです。「学校に行かない」と宣言して行かないのではなく「学校にこだわっているが、行かない」という状況です。

「親の義務は子どもの教育を受ける権利を保障することであり、地方自治体も同様に義務を負っています。単に学校に連れていくだけでなく、もっと広く子どもの教育を考えなければと思います。このことに関して以下の質問として」と続きます。「一つは守山市の登校拒否の実態、県のデータもあれば、それも含めて」。二つ目「守山市における登校拒否に関する調査、研究、報告書、論文などの資料」。三つ目「守山市における今後の行政の対応。守山市は登校拒否に関して福岡県、神奈川県のように登校拒否児童のための学級を設けることを検討しているか。またその可否及び見通しについて」。こういう質問状を出したのが、1984年です。

もちろん答えはありません。ないことはわかっています。ですが、「親が子どものために何をしたいのか」ということを、この質問状の中に表したということです。当時、情報公開は今のように盛んではなかったから情報公開の一つの先駆例かなと思っています。

子どものころがわかる？

不登校のデータはいい加減だなと思っています。8万人を超えたと大騒ぎしたのが、1996年です。学校基本調査で出てくる情報が半分眉唾かなと思っています。今は10万人を超えたと。昔から高校生の中で年間、10万人は進級しないというデータもありますが、10万の壁は大きいなど。子どもが少なくなるのに不登校が増えるのはどうしてか。私の場合、「自分の子どもは特別な存在であって、自分の子どもに問題があるから、家庭に問題があるから学校に行かない」と考えていなかった、当時から。だけど「なぜ学校に行かないんだろう」、それがよく分からない。未だにわからない。

「子どもの気持ちをわかりますか？」という問い掛けを教員から私にされることがよくありました。私は「わかりません。子どもの心がわかる人がいるんですか？」と子どもの心をどう理解するかという論争をして、私は「わかりません。わからないからどうしようかと考えているんです」という対応で。めんどくさい議論ですが、学校とのやりとりをした昔の思い出です。

私が昔、読んだ本の中に、心理学者の話があります。心理学者に2歳の息子がいた。新築したばかりの家に真っ白な壁に黒々と落書きをする。「こんなところに落書きをしたらいかんじゃないか」とお尻をパンパンと叩く。子どもは「ワーン」と泣く。ひとしきり泣いた後、子どもは親の手を引っ張って「ここにもあるよ」と指さす。また怒る。また違うところで「ここにもあるよ」と子どもは行動する。心理学のテキストには「5、6歳までの幼児は快さを求めてよいことをする。よいことをすれば褒められて快く、悪いことをすれば叱られる。だから褒めてもいたさに、よいことをする」と書かれているそうです。ところが子どもが壁を汚す、怒られてお尻を叩かれて「ワーン」と泣いて、また違うところで「ここにもあるよ」と行動する。どういう常識なのかなど。「子どもは辻褄を合わさなければならぬ」という行動をするのだな」とよくよくわかった。自分の子どもを通して、その心理学者は、これまでの心理学のウソに気づいたというんです。

「子どもの心を親がわかる」ということもあると思いますが、私はこの21年間、子どもの心に寄り添うことはできたとしても、理解はできないな。子どもは別人

格だ」というつもりでいたわけです。不登校のことにに関して日本弁護士連合会が「子どもの人権救済の手引」をつくりました。1987年です。登校拒否、不登校を持つ子ども、親、教師等に参考になる考え方があるなと思っています。当時の学校関係者の見方と全く違う見方をしているなど。

教育とは何でしょう

教育には「二面性」があると思います。一つは「子どもの個を伸ばす」。もう一つは「社会のため、国家のため」。どちらの方を強調するか。全体の流れは、最近では社会に重きをおいたようでも徳教育の議論がされていると思いますが、そのへんの考え方に風穴を開けたような人がいたなと思いました。イバン・イリイチという人です。学校と病院に関して鋭い発言をして、世界をリードした人だと思います。あの方は論文を書いたからあまり発言しなくなりましたが、若い研究者の方はぜひ読んでみてほしいと思います。イバン・イリイチさんは最近、亡くなりました。『脱学校化の社会』『脱病院化の社会』『シャドウ・ワーク』などを書かれています。教育というのは集団の中でやるものか、個々の人たちのためにやるのか。医者、カウンセリングの方は、相手と一対一の関係でやりますが、学校教育は教壇があって、生徒、学生が聞いているのが教育だと誤解されていると思います。私の21年間、学校と突っ張ってきて「自分は自分の子どもを教育します」と宣言してきました。実際にできているかどうかは別ですが、「親がやらなくて誰がやるのか」と。私は子どもを学校に預けているわけではありません。「子どもについては私が責任を持ちます」と思ってやってきました。

1983年、「生徒の健全育成をめぐる諸問題」として文部省が資料集を出しています。文部省の人たちは登校拒否の原因、背景をどう押さえているか。こういう考え方は世間一般の常識だと思います。本人については「不安傾向が強い」「優柔不断である」「柔軟性に乏しい」「社会的、情緒的に未成熟である」「神経質な傾向が強い」。家庭の問題では「親の養育態度が過保護である」「言いなりである」「過干渉である」という書き方をしています。私は「過保護であれば不登校、登校拒否になりますか？」「過干渉であれば登校拒否、不登校になるんですか？」と言いた

いわけです。「なぜ学校に行かないのですか？」と誰に聞いてもうまく説明してくれなかったと思います。私はこういう資料を集めては、学校と、担任と、校長と論争してきました。中学校長には「卒業させる、させないというのは学校長の権限だが、私の子どもを卒業させないなら、どんな方法を使ってでも不当な学校の対応について問題にしていく。裁判も辞さない」と宣言してやってきたんです。あの当時、中学校を卒業するのは「校長の裁量」と言われていたんですが、「学校じゃないところ、こういうところに行けば卒業させますよ」と飴の方法をとるところがありました。「保健室まで行ったら出席を認めますよ。そしたら卒業できます」。3年生の最後には「学校まで来たら卒業させてあげます」。私の場合はハナから行きません。学校に行かなくても卒業させたケースはいくらでも知っています。「留年をさせるのは人権侵害ではないか」と言ってきました。

1983年の「生徒の健全育成をめぐる諸問題」に書かれている「登校拒否観」は、この時だけではなく、面々と続いた日本の学校教育の流れで書かれているなと思いました。このへんが崩れるのが1992年です。文部省は「どの子ども不登校になりうる」という表現をして、「登校拒否は別に特別な家庭や子どもの性格から生ずるものではない」と文部省自らが言ったということです。その頃から教育に携わる方の反応がガラリと変わったのも不思議だなと思います。お上が一言、言えば教育関係者は変わるのかなということです。その頃から「登校拒否」「不登校」については寛容になった。「行きたくないならゆっくり休んでいいんですよ」と堂々と言われるようになった。なぜ変わったのか自分なりに追求してみないといけないのですが、世の中はそういう流れになってきた。ますます登校拒否、不登校は増える。子どもは減る。「じゃ、学校教育は何ですか？」「不登校に対する教育は誰が行うんですか？」という、その問題については誰も回答がないという現状です。

会の存在

私のところに手紙やメールが来ます。最近、来た手紙です。「私は少年院の教官として3年目に入りました。3年目といってもまだまだわからないことばかり、至らないことばかりで失敗ばかりの毎日です。寒さに負けぬようがんばっています

す。最近は地道に努力する、地道に何かすることの大変さを痛感しています。そして派手ではないものの十数年も続いている貴会の地道さには感心するばかりです。何とか挫けそうになる私の励みにもなります。この方はある大学を出て、教員試験を受けたんですが、最終的には少年院の教官の職を選ばれた。この方は会によく来てくれて、子どもの相手をしてくれた方です。会の存在は誰かに影響を与えているなと思ったりします。

メールもいただきました。「現在、僕は適応指導教室にインターン生として週1度参加させてもらっていますが、そこではちょっと視点がずれているのではないかと思うことが多いです。まず学校に戻そうという雰囲気はいつも感じられます。僕は不登校だった頃、フリースクールに通っていて、そこは自分の判断で学校に行くか、フリースクールに行くか、家にいるか、常に考えさせられました。選択権は自分にあり、どの判断をしてもOKでした。行政とか教育関係者、学校は不登校の子どもがいると、そのことが恥と思われるのかどうかかわからないが、一生懸命学校に戻すことに専念される。『こうやって私は学校にたくさん子どもたちを戻しました』ということをやりにする人たちもたくさんいます。研究発表もされています。このへん、おかしいなと思っています。学校へ戻す、戻さないという問題ではなく、その子どもがどういうふうに通達しながら大人になって、自立した道を選ぶのかということに、いろんな方法があるということを理解してほしいと思っています。私たちの会では自由に発言をしたり、自由に行動してもらうことを中心にやっております。

子どもの幸せと親の気持ち

私も昔、子どもが小学校の頃、守山市の自宅ではなく、違うところで子どもが生活できないかと考えたことがあります。それは山村留学です。山村留学は自治体が過疎化対策のためにやるんですが、そこに子どもを連れていきたいなと思ったこともありました。あの当時、全国で調べると10か所くらいしか資料がなかったんですが、今は増えています。少人数教育で子どもたちは成長できるのかなと思ったりしました。しかし実現はしませんでした。手紙を書きまして「ぜひ検討

してください」と和歌山県のあるところに出したんですが、校長から丁寧なお断りがありました。「あなたのような考え方をする親の子どもはちょっと無理ですね」という内容だったと思います。

親は子どもを本当に幸せになってほしいから、どんな方法でも子どもの気持ちに沿うような行動をとるわけです。昨今、言われているのは「居場所」という言い方ですね。フリースクールに行かそうとするのですが、私は子どもの選択に任せたいのではないかと思います。「子どもが行きたかったら、行ったらいい」「行きたくなかったら、家にいたらいいい」という考え方ですが、行政ともども「学校がダメだったら、次はどこか」「学校がダメだったら保健室」「学校がダメだったら校長室、教員室」と違う部屋と行かせようとしています。「学校がダメだったら適応指導教室」と「子どもは学校に行くもの」というのを前提にした考え方が日本に充満しているということだと思っています。そういう考え方にそろそろおサラバをしないといけない時代ではないかと思っています。家に籠もっている子どもたちの方が、はるかに情報量が多いのではないかとも思います。インターネットの普及、マスコミの普及等で情報は家にいながらどんどん手に入れることができる時代になりました。「情報の普遍化」でだんだん安くなるんですね。昔、トフラーが『第三の波』で「これから情報化の時代が始まる」と宣言しましたが、どんどん今、広がりがつつある。学校教育もインターネットを使った新しい取り組みをしないと「学校へ来なさい」「教室に入りなさい」「学校生活を元気で楽しくやりましょう」という教育観におサラバしていただかなければ、これからの学校運営は難しいのではないかと思っています。

学校現場から考えること

実は「学校に行かない子と親の会」というタイトルをつけながら、一番の問題はどこにあるか。「学校現場」ではないかと思っています。「学校に行かない選択」をした子どもはまだ救われる。学校に行って学校に合わせて生活している子どもたちは大変だなど。どんなに辛くても皆から爪弾きされないように、いじめられないように学校にすがりついている子どもは大変だなどと思っています。学校が不

登校の子どもたちを生み出し、不登校を選択した子どもたちは学校には寄りつかない。だけでも学校にしがみついている子どもたちはどうしたらいいんでしょうかね。そういうふうには私はこの15年間、そして21年間考えてきたように思います。問題は「学校に行かない子どもをどうするか」ということではなく、「学校現場をどうするか」を教育の専門家である教師は先頭に立って研究し、学んで、カウンセラー、医師、学校関係者も真剣に議論してほしいなと思います。真剣に議論することは子どもたちを窮屈にすることに多分なるだろうと思いますね。皆さんがまともに、真面目に手を打とうと努力することは教師の負担を増やします。どんどん教師は忙しくなってきます。そういうところで「子どもたちが楽しく学べるのか」と考えると、学校というのは子どもにとっても大変なところだし、教師にとっても大変なところだし、結局、学校という問題について、学校自身は努力することは必要ですが、学校以外の国全体、地域、それぞれの家庭にいる皆さんが「どうしたらいいかな」と考えないと改善できないのではないかと考えています。「子どもの声を学校の中に反映させる」システムが必要ではないかと考えています。

私はこの会にかかわりながら、運動をしたことはありません。不当な扱いを受ける子どもがいたら抗議に出掛けようと思ってはいますが、実際に行動に打って出ることはありませんでしたし、してもいないわけです。そのような行動の反動がきついですね。会員さんの中で学校の担任を訴えて裁判された方がいます。子どもが成長期にあるわけです。子どもというのは一定ではないので、常に前へ行ったり、横に行ったり、後ろに下がったり経験しながら大人になっていく存在です。一時の気持ちの高まりから子どもの幸せを願って裁判に訴えて取り組みをされることがありまして、私ははたから見守っていたんですが、子どもの心に一生の傷になるような問題を司法的にとりあげて解決しようとしても、なかなかうまくいかないのではないかなと。彼の場合、担任の先生が柔軟だったら、どうということはない話なんです。先生は自分の責任にしたいくないので言いつくるところがありました。大人の汚い面が裁判を通して見えるわけで、そういうことよりもっと皆、素直になったらいいのではないかと考えたりします。「子どもたちの幸せをどういうふうにかえたらいいのかな」と考えながら15年、この会にかか

わってきました。

「こういう会が早くなくなればいいのにな」と思いながら、あと5年、10年、続けないといけないのかなと思ったりしています。皆さんの場合、いろんな経験をされて不登校の子どもの問題をどういうふうにかえたらいいかの感じながらここに来られていると思いますが、私が言いたかったのは「不登校の子ども、登校拒否の子ども、ひきこもりの人を何とかしよう」と思うのも結構ですが、問題はもっと違うところにあるのではないかと。「学校そのもの、学校制度というものが、不登校の子どもたちを生み出したりしていないのかな」と、「じゃ、どうしたらいいのかな」と自ら考えるきっかけになるのではないかとということです。今回のテーマは「当事者」ということですが、私自身、当事者能力に欠けていながら人前で話をしないといけないので、辛いなど。自分で問題を未だに解決できていないことがあるわけで、そういう経験を皆さんのところに報告してもあまり役に立たないのではないかとと思ったりします。だけど、私のようなちょっと違った考え方をする人が、こういう会を十数年にわたって一緒にやってきた。この会に関わって喜んでもらった人たちもたくさんおられますので、そういう意味では、何か貢献ができたかなと思いますが、自らの子どもを「じゃ、お前はどうしたんだ？」と責められると何も報告できないなと思います。だから「子どもの心はわかりません」というふうによく口走っています。

こころの専門家

子どもの心の問題については立命館でも専門家をつくらうとされているわけですが、心の問題についてはいろんな立場からいろんなことを言われます。ある人は「Aという立場から」、ある人は「Bという立場から」、ある人は「Cという立場」でカウンセリングをする。また、ある人は「Dという立場」で精神分析を行ない、ある人は「家族療法がいいですよ、この場合は行動療法です」、と一杯あるんですが、しかし「子どもの心ってどういうふうにしたら理解できるのですか？」と言いたいわけです。日本の中に医者はいくらいるけれど、児童精神科医はどれだけでしょうか。100人くらいだと思います。子どもの心のことを研究されてい

る、臨床でやっている専門家、児童精神科で学ばれた方、実践されている方は少ない。子どもが学校に行かないと「病気です」と言われて「じゃ、何とか治療しましょう」「入院させましょう」「投薬がいいですね」。1990年前後、いろんな問題が日本で起こりました。「登校拒否は病気じゃない」というスローガンさえ生まれたほどです。

「問題があれば、治療すればいい」という考え方でしょうが、登校拒否の子どもたちの現実を知らない人はそういうふうに出ると思います。子どもの心が痛んだ時に、出てくる状況はいろんな方向に出ることがあります。これを「二次的な症状」と言いますが、たとえば、真夜中に奇声を発する。近所迷惑です。屋根の上へ上がって大きな声でしゃべっています。何か叩いています。これを「病気だ」と見る人もいます。「何とか治療しなければ」という人もいます。その人の本当の姿を知らない人たちは「何とかしないといけない」と思うんでしょうね。不登校の問題は、いろんなことを副次的につくり出しています。子どもは自らの発言、表現をしているだけなんです。そこをうまく理解してやらないと間違った判断をしてしまうことになりかねません。ある医師、河合洋さんかな、彼は「私がみた子どもの診察の中で80%は多分、その診断で正しかったと思うけれど、何%は違ったんじゃないか」と言っております。本の中にも出てくる話で、私も直接聞きました。

医者は「何かの病名をつけないと納得できない人種」ですね。「医者にかかることは病気にしてしまう」ことなんです。何ともないですよ」と言えない。児童を扱わない人が、子どもが来た時「何とか病名をつけてあげないといけない」と病名をつける。日本は、病名をつけてもらうと納得したりする。親もコロッと騙されるんですが、「専門家ほどいい加減なものはないな」と思っています。「登校拒否」「不登校」と言われる人たちが本当に病気である人は少ない。1995年、大阪で全国ネットワークで全国合宿をやり、私もある分科会の司会をしながら、門真一郎先生を助言者にお迎えして運営して、親が大半だったと思いますが、全国から参加されました。「精神医療とのかかわり方」というタイトルで、ここで発言された内容が大問題になりまして、夜中に私も呼び出されて「録音テープはないか」と大騒ぎしました。翌日、総括会議があり、質疑でいろんな意見が出されていま

す。専門家と患者の関係ですが、お手許の資料はそのへんの経緯を書いたものです。

私と佐藤幸男さんとの対談『子どもが決める時代』というタイトルの本があります。門野晴子さんという元気のいいお母さんと山下英三郎さんというスクールソーシャルワーカー、日本で初めて「スクールソーシャルワーク」という言葉を持ち込んだ方です。山下さんと門野さんと私がそれぞれ佐藤さんと対談した内容が載せられています。1992年、私は今ここで言ったのと同じようなことをこの中で述べています。

岩波講座で『現代の教育』の中で森田洋司さん、不登校の問題について統計的に本を書かれた人、浜田寿美男さん、河合洋さん。その本の中で山田潤さんが「学校に行かない子どもたち 親の会が問い掛けていること」というタイトルで一つの章を受け持っています。その中で「京都の会」のことが出てきます。「新聞の短信欄に『学校に行かない子と親の会』の例会の案内が出ているのを、まさに吸い寄せられるように目をとめた。こんな名称で活動している会がある。すぐにその会の世話人として名前を出している恩田良昭に電話をした。予感的中した。私の問い合わせに恩田は次のように返答したのである。『学校に行けない可哀相な子どもを何とか行けるようにしてやろうという会ではありません。“学校に行かない”という子どもの選択を正当に受け止めようとしている考え方を基本にしています』。京都の会の様子はこの中に端的に現れています」と京都の会の紹介があったと報告しておきます。

当事者からの問題提起

中村 ありがとうございます。第3期のケア新時代シリーズ企画全体のキーワードは、「物語」「当事者」ということです。当事者の紡ぎなおしの奇跡を確認しながら、聴いている側の物語の変化を誘発したいということで企画しました。もちろん当事者は未だ紡ぎなおしの物語の途上にあります。生きた物語であり、シナリオのないドラマです。それを聴いている側の、不登校観や学校観、ひきこもりについてもっているイメージ、薬物依存者へのイメージなどを問いなおそうという試みです。

今日の話も、不登校を「こんなふうに学校に行けるようになりました」という学校復帰のめでたい物語ではなく、今、27歳になる子どもさんと寄り添いながら「親という当事者」「学校に行かない子どもとともに歩む当事者」について考えていくことにしたいと思って、恩田さんにおこしいただいたのです。恩田さんは親として不登校問題に登場します。あくまでも不登校の当事者は子どもです。しかし何からのサポートが必要だという時、「親という当事者」がどのように立ち現れるかということが、今日、聞きたかったことでもあります。恩田さんは不登校の当事者ではない。不登校の子どもの親という存在です。親は、子どもを守ることができたり、子どものことを代弁したり、あるいは逆に抑圧したりします。そこにはどんな当事者性がみいだせるだろうか、どんな努力の軌跡があるのだろうかということを知りたいと思っていました。会をつくって自助的な活動をするのはアクティブで、それはdoingなんですね。しかし当事者の家族として不登校の子どもをもつ恩田さんがやっているのは、あるがままに受け入れるという意味で、それはbeingだと思う。「そこにそのままある」という、そのことの大事さを、話を聴きながら考えていました。親は確かに不登校の子どもの親としての当事者性を持ちます。その当事者性とは、保護し、理解し、守り、代弁し、行動するという側面、動揺し、変化し、どうしようもないという親自身の価値観の問いなおし、登校刺激を与え、学校に復帰させようとする、あるいは精神科に無理に診察させるという抑圧する存在、あるいはこれら以外にどんな存在の特性があるのか。それを考えてみたいと思い、親であることの意味をお話いただくこととなりました。「子どもを理解できない、心なんて不透明だ」と恩田さんは言いながらも、しかし何かできることの一つのあり方を追求しておいでです。恩田さんは公にも発言されておられます。恩田さんが紡ぎだしている学校への問題提起、家族のあり方を十分に社会の方がストーリーとしてまだ聴く力をもっていないように思います。恩田さんの話や実践を聴いていると、聴いている側の波風が立ち、理解するのにエネルギーがいるのです。聞いている側のストーリーが揺れる大事な問題提起をしていると思います。

今回の企画では、「不登校」「薬物依存」「ひきこもり」「自傷行為」と当事者の方々に話を聴くことにしました。でも、「何とかしてやらないといけない存在」として物語ろうとは思っていません。聴いている側の私たちのストーリーラインが揺れたり、さざ波が立ったり、何か考えてみたくなったりするというストーリーとして話を引き出してみたいと思い企画したのです。それは、イリイチの『脱学校化の社会』『脱病院化の社会』も引用されながら話を紡ぎだされたこととも重なります。当事者の話を聴くと、私たちが持っている学校観、ひきこもり観、薬物依存症者観それ自身が揺らぐ可能性があります。なぜなら、たとえば、私は学校にずっと居続け、今でも学校にいるわけです。皆さんも学校に居続けてきたわけです。当事者としては躊躇があったりするのですが、そのことへの反省的理解が大事かなと思って企画した当事者に聴くシリーズなのです。当事者に聴くと、聴いている側が痛みを感じるということなのです。

学校化され、学校に今のようなストーリーを対案として持つこともなく、ここまで来た人も多いかもしれない。中には不登校だった人もいるし、適応指導教室で「適応された」人もいる。「戻ってきてよかったね」と言われた人もいるでしょう。それなりに学校化という物語をもっているはずです。恩田さんはそれとは別の物語を生きることとなった方です。「学校に行かないことを選択した子ども、そこにあるその子どもの存在を認める社会にするにはどうしたらいいか」という問題提起を、皆さんがどう感じられたか。お話を聴いて質問とかありましたら発言してください。

質疑応答

質問 娘が不登校で、何とか脱しているんですが。自分の中で娘が不登校になった時、学校を考えた時、統計的に調べていくと、ふと足元を見た時、学校からはじき出されている子どもたちの数の多さにもびっくりしています。自分の娘のことで周囲に相談した時、「無理して行くこともないよ」と言いながら、一方では現実に社会の状況からはじき出されている子どもたちの問題も見えてくるという自己矛盾も感じながら来ているんです。もう一つ、文部科学省の不登校の協力者会

議とかを見て、なんとひどい中身かなと。どういうふうにお考えになるでしょうか？

質問 文学部2回生です。僕自身、登校拒否をしていた時期がありまして、その頃のことを親とも話をするんですが、「なぜ学校に行かせなかったのか」ということ、子どもの意見を尊重した上で今まで学校に行かせない立場をとってきたかと思いますが、なぜ子どもの意見を尊重する立場をとったのかということをお聞かせください。

・行政の対応

恩田 文部科学省の協力者会議で、不登校の問題を検討するのに専門家がほとんどいないという状況があり、全国的にも抗議が渦巻いている。関係者が怒りを表している。行政は専門家を集めてくる。それは都合のいい人たちです。道路問題でもそうですが、昔から自分たち行政がやりやすい人たちを集めてきて検討させたり、審議会をつくって「改革します」と言っています。ゆとり教育でも議論をするところですが、週休2日制になった年が1992年です。「土曜日も休みましょう」と。それからゆとりの方向が出されてきた。いろんな改革をする時に専門家を連れてくる。専門家は結果的に行政に都合のいい人たちを連れてくる。だから国民と、教育現場と、子どもたちと、文部省が出す政策がずれてくる。教育をつくる原点は子ども本人、親そのもの、教師、地域社会、ここが対等な関係で結ばれないと本当の改善はできないのではないかと思います。

親の意見はPTAにお任せとか。最近の問題は30代、40代の親をもつ子どもたちが、小学校1年生で授業が成り立たないと聞いています。教室を運動場のように走り回る。ベテランの教師が何とかしようとしても子どもたちが言うことを聞いてくれない。親は「学校の問題は学校で解決してください」という立場ですね。そのへんがずれているなどと思っています。「学級崩壊」が出てきたのが2、3年前ですが、日本の教育でマスコミが煽るせいもあるでしょうが、問題が波のように周期的に出てくる。高校における「校内暴力問題」が起こったのが1983年です。次に「いじめ問題」が10年超えて1995年。10年くらい出てきて問題視され、現

場でも問題になる。学校が荒れる、いじめの問題が10年おきに出てきます。そして「学級崩壊」。学校が学校として機能しなくなった。「従来の学校ではだめだ。オープンスクールとか違う教育方法を考えよう」と言われてきたりしています。少人数だったらうまくいくか。決してそうではない。北海道でも問題がある。福岡でも問題がある。全国共通に出てきている現象があると思います。それに対して文部省が何か手を打たないといけないという時、都合のいい人たちを集めてくる。上から政策を被せるためのものです。そこからは現場、子ども、親と直接向き合うような政策は出てこないと思っております。

・子どもの安心するところ

二つ目の問題。私は子どもが小学校1年生の時から「自分で決めたら」という立場でやってきました。もちろん子どもにはそういう言い方はしませんが、「Kちゃん、嫌だったら行かなくてもいいよ」と言ってきました。これは今も一緒です。そのことがいいのかどうか、いろいろあるでしょうが、子どもに決めさせるのは酷なことだと思いますが、「学校に行け」と強制的に行かせる方法は「行動療法」ととればいいわけなんですね。「今日は家から出て、あそこの角までいけた。よかった」「今日は角を曲がって佐々木さんの家までいきましょう」。学校に近づくことによって子どもの恐怖を取り除く。「いよいよ学校の前まで来た」。学校の前に来た時、子どもの表情はどうか。なぜか他の不登校の子どももそうですが、学校に向かうと頭がだんだん下がる。人間って目で前を見る。目的地に向かって歩いている人たちは正面を見ます。学校に行きたくない子どもは背中が曲がって頭を垂れて挨拶しているような状況です。足元はふらふらのおじいさんという恰好で、学校まで何とかたどり着くわけです。何回か繰り返して「門のところはクリアしました」「次は下駄箱までいきましょう」。訓練を繰り返して「学校の恐怖からその子が自信を得るまで段階的にやりましょう」という方法もあります。それも一つの方法かなと思ったんですが、それを実際に援助してくれる人たちがいなかったので「子どもが行く」という時には母親が自転車まで連れていくという状態でした。

学校に行くのが嫌だと、教室で片隅に行くんですね。ごみ箱を抱えているとか。子どもって自分が安全なところを選びます。教師の教卓の足元に入り込む。自分

が安心できる場所を選ぶんですね。それが日によると鳥小屋だったり、橋の下だったり。子どもが一番安全な場所、安心できる場所、不安のない場所を提供するのが親の務めだと思っていますので「学校に行きたい」という時には、行くように援助し「行きたくない」という時には家で安心できる環境をつくる。学校に行かないことがマイナスにならないように「別に学校に行かなくていいよ」と普通の顔で言う。

・親が変わる

親は大体、ウソを言うんですね。「学校に行かないでいいよ」と子どもに言いながら目がウソを言っているわけですね。ウソを言っているのは子どもはすぐ見抜くんですね。例会で話をすると「学校に行かなくていいと言ってます」と言いながら「本心は本当は行ってほしいんです」と親は語るんですね。親が例会に参加するごとに変わってくる。なぜ変わるのか。親の生活習慣、生活態度を変えることで子どもの状況が変わってくる。「家で暴れている子どもがいて困った」と会に相談に来る。いろんな経験を持った人たちがいろんな角度から話題を出して「こういうふうに考えたらどう？」「私の家はこうだけど」とさりげなく繰り返すと「ああ、よかった」と元気になって家に帰る。同じ現実が残っている。来月になって、同じように「まだ困っているんです」。相談を受けて自分の経験なり「こういうふうに考えて親が笑顔を見せると子どもは安心するね」と話をしてあげると、また親は「家に帰って実践してみようか」と思う。親の対応が変わると子どもたちも同じように変わっていくという報告が多いです。それはなぜか、よくわかりませんが、親が変われば確かに子どもたちは変わってきますね。

私の場合は、子どもに任せました。一言で言うと「自分で決めたら」ということなんです。小さな子どもにはそういうことは言いませんけど。20年前は思い出せないけれど。「行こうかなと思ったら、行ったら？」「行きたくないと思ったら休んだら？」と言っていたと思います。それは基本的に変わっていません。自分の子どもが「こうなってほしい」という親の欲望があります。他の子どもにも同じように言えたらいいことだと思うんです。近所に同じような子どもがいたら、その子どもに声をかける場合も自分の子どもと同じように声をかけてあげたい

い。自分の子どもだけ幸せになってほしいということではなく。子どもも一人の人格を持っていると思っているから、子どもに対して、朝、顔を合わせたら「おはよう」と言います。出ていく時には「行ってきます」。帰ったら「帰りました」と。「子どもだから」という対応はしてこなかった。

・子どもから学ぶ

そういう私を見て妻はどう言うか。「お父さんは子どもに対して冷たい」。世間では「お父さんとお母さんは考え方を同じにして子どもにあたりなさい」と言うんですが、私の場合は違います。父親は父親の考え方、母親は母親の考え方があるって当然です。子どもの関係においては、父親は子どもにわかりやすいように父親の意見をつけてわかるように説明しましょうと。母親も同じです。お父さんは「行くな」と言い、お母さんは「行け」と言う。対立しますね。それぞれに理屈がついていればいいと思うんです。お父さんが「行け」というには理由がある。「将来このままではこの子どもはだめになる。どんな辛いことでも耐えるような火の中をくぐり抜けるような元気を出してほしい」と子どもを励ます父親がいると思えば、母親は「この子は昔から体が弱くて可哀相な子どもで、他のきょうだいからも異端視されて、私が守ってやらなければ」と対立しても構わないと思う。お父さんはお父さんの考え、お母さんはお母さんの考えとわかるように子どもに接してあげたら、一向に構わないことだと思います。

子どもの人格、子どもの要求を無視して「子どもは学校に行くものや、あたりまえやないか」と言ってしまえば身も蓋もないんですが、子どもとの関わりを通して親の方もいろんなことを学ばされていると思っています。

私も子どもによっていろいろ学ばされた20年だったと思っています。教育の基本で、教師と子どもとの関係は「教える者」と「教えられる者」という関係で日本では言われてきたと思いますが、「子どもに学ぶ」ということ、そういう姿勢、考え方を大人の方が持たなかったら、この国はよくなるなどと思っています。「子どものすばらしい点を認めてあげよう」ということだと思うので「皆と一緒にがいいですよ」と思わない。「この子はこの子の特徴がある」と「一人ひとり違って、みんないい」という金子みすずの詩を思い出したりしています。

・ひきこもり

中村 恩田さんは、27歳になるお子さんに長く寄り添ってこられて、世間から見るとその子は「不登校を克服できずにひきこもっている」というラベルを張られるかもしれませんがね。確かにひきこもりが不登校の延長となる事例もあるかもしれませんがし、そういう文脈でひきこもりが社会問題として語られています。恩田さんは彼の存在を丸ごと認められるという立場です。今の局面をどう思われますか。

恩田 これもいろいろ考えるんですね。ひきこもりの問題については昔、稲村博という人が朝日新聞の夕刊に「不登校の子を放置しておいたら将来大変なことになる。無気力な大人になっていく」と。実は新聞記者がそれを書いたといわれているんですが、それが夕刊トップに載った。それを見た不登校を持つ子どもの親はびっくりして大変な騒ぎになったんです。それは狭い世界なんです。不登校の子どもを持っているのは少数者なので、その人たちのところに波紋を投げかけた。「学校に行かないという選択をしていると将来、無気力になる」という論調がされた。私もその時は腹が立ったんですけど、今の様子を見てみると、無気力なのかなと。「何もしていない状態を無気力」というのか「考えている」というのか、表現はいろいろあると思いますが、何もしていない状態を見て「何も考えてない」と皆さんは思われるのでしょうか？ 寝てばかりの人は「何も考えずに寝てばかり」と思うのでしょうか。「無気力な人でも何かを考えているだろう」という見方を私はしていたんです。

現在でも、無気力でもなく、パソコンはまあまあ使えますし、外へ出てやるのがいいというわけではないんですが、家にいても元気だということですが、医者で診断すれば「潔癖症」「対人恐怖症」という名前をつけるのかなと思います。一応元気なんですね。「日光に当たらない子どもは不健康だ」という考え方が日本にはびこっていると思うんですが、その子はほとんど日光に当たらない子どもです。色は白いですよ。外に出ることがないから。健康診断を受けなかった歴史が長い。十数年、健康診断を受けておりません。医者にもかかっていない。医者にかかるなら家から出て何かするんですが、「病気でもして入院でもしてくれない

かな」と僕も思って。社会との接点、親以外の接点ができると思うんですが、歯が痛くても我慢しているんです。そのうち「痛くなくなった」と言ってますが、人間はなかなか病気になるものだなということがわかりました。だから本人はいきいきしていると思います。

人間って1日1万歩歩きましょうというのですが、狭い家の中で3000歩も歩いてないかなと思います。病気もしていないわけです。そういう男の子がいてもおかしくないなと思います。

性差で分けるとおかしくなる。「女の子は家にいて家事をやっていけばいい」という考え方があったと思いますが、まだ許される。「男の子は外に働きに行くべきだ」と世間では言うのですが、僕は男でも女でも家事ができれば結構なことだし、私自身も家事については一向に構わない。料理もするし、洗濯もできる。一人での生活は十分できる。20歳になったらそれぞれが独立して親の役目を終わったら、早く引退して今の仕事から足を洗って自分の生き方を考えたいと思ってきたんですが、27歳の子どもをはじめ、扶養家族が3人いるという環境の中ではなかなか仕事は辞められないという現実です。子どもが将来どうなるか、悩ましい問題ですが、年をとっている方が先に死ぬのはあたりまえなので、パソコンの画面には「お父さんが死んだら、こうしてください」と書いてあります。「家の処分については誰に相談しなさい」「生活保護の受け方」とか書いてあります。それは見ているのかわかりませんが、そういうものは一応は残しております。

中村 プライベートなことをあえて立ち入って聞いたのは、不登校からひきこもりへという、そのことが社会的にも関心事になっていると思ったからです。真摯な思いでした。その渦中にある恩田さんは子どもさんのことをどう見られているか、不登校であったこと存在を認めることの延長線上に今はどうあるのか。こうだと言えない、悩んでいるとしか言いようがないということを含めて、恩田さんが子どもと共に在る、その物語への意味の紡ぎだし方が貴重かなと思ってます。親子で年を重ねて行くのですから。それとジェンダーの問題も語られました。男の子だからいい若い者が働きもせずという文脈で問題にされやすいということです。それは確かに恩田さんの家の物語かもしれないけど、身を挺して訴えてき

た子どもたちの声を聴くことを、どう大人たちがなしうるかということでもあると思います。家に長くいる状態はそれはそれで生きているし、父親と一緒に暮らしているし、特に問題もない日常として過ぎて行きます。これはこのまま「あるがまま」として共在しているのですが、恩田さんも年をとり、定年を迎えますよね。重ねてお聴きします。お二人の関係はどう変化していくのでしょうか。

・自然に暮らす

恩田 子どもたちは私に頭が上がらないと思うんですね。言い方は変かもわからないけど。大学に行っていないことも引け目ですね。社会に出ていない。養ってもらおう。これも引け目ですね。マイナスの要素ばかりなんです。子どもは親を乗り越えるものだという考え方は昔からあったと思いますが、多分、子どもたちは私を乗り越えられないのかなと思って、私はひょっとしてドロンして消えてしまった方が子どもの自立にはいいのかなと逆に思ったりすることもあります。私も一度、長期で入院できないかなと思うんですが、残念ながら入院するほどのこともないので一緒に暮らしているんですが、一緒に暮らすことが、逆にマイナスになっている要素もあるかもわからない。子どもが「僕のために長年こういう会をやってくるのはもうやめてください。僕は辛いんです」と言ってくれたら大手を振って会からバイバイできるなということですが、それも言えない。自分の主張を親に告げられない子どもは逆の意味で、大分しんどいかなと思ったりしています。まだ私に対して反抗をしたことがない。反抗期ではないということ、全面屈伏をしたという形になっているので、私もどこかで負けないといけないと思うんですが、なかなかそういう場面が出てこなくて、どうしたものかなと。長期にどこかに消えてしまえばいいかもわからないのですが、ただ人間として自然に暮らしたいなという考えも持っています。一緒に人目を避けて、都会ではない暮らしができたなら本来の自分を出してくるのではないかなと思って、ひそかに考えていることで、まだ実現はしませんが。私も次の展開を考えないといけないと思っています。

・終わりに

中村 また5年くらいして来てもらって、その後の恩田家の物語をお話していただきと思いました。成功物語でもないし、失敗物語でもない。期せずして、不登校からひきこもりのお子さんとともにこの社会の問題状況を考え、考えながら過ごされた時間と思考の重さを感じました。さらに、つくづく、援助の専門家は問題を必要とするんだなと思いました。援助者は問題がないとやっていけない。常に問題をつくり出したり、ラベルを張ったり、次の問題を見出したりして自分のアイデンティティをつくっていますので、そういう援助者の在り方へも問題提起があったと思います。考えさせられるなと思っています。当事者がゆるやかに支え合うような「親の会」のような組織はまだ必要だろうと思います。問題とともに「そこにある」ということを実践している当事者団体は貴重です。援助を考える上で、主体性をもつ当事者は厄介な存在なんですよ。喧しいんです。しかし日本の援助職者はそれを無視してきたり、距離化してきたり、単に対象化してただけかもしれないことも考えていきたいと思います。「対人援助の専門家は何なのか」ということも問い掛けてみたい。恩田さん、プライベートなことを含めてお話していただき、ありがとうございました。